

心を打たれて

—東日本大震災復興支援ボランティア活動に参加して—

奨励	伊勢 希【いせ・のぞみ】
奨励者紹介	同志社大学神学部生

人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と言った。すると、ペトロは彼らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼【バプテスマ】を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」ペトロは、このほかにもいろいろ話をして、力強く証しをし、「邪悪なこの時代から救われなさい」と勧めていた。ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業と行いが行われていたのである。信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。

(使徒言行録 二章三七―四七節)

今回、私は四月一日から九日間、日本キリスト教団兵庫教区被災者生活支援長田センターから援助をいただき、宮城県石巻へボランティアに行ってきました。

一日目仙台に着いたときは、それほど地震の痕跡は見られなかったのですが、石巻に近づくにつれて光景は一変しました。そこには見るも無残な光景が広がり、本当に私たちにできることが何かあるのだろうかと思わされるものでありました。石巻に入りますと、何ともいえない臭いがします。ヘドロ、つまり生活排水や汚水、ガソリンなどが混ざったものが乾き、風で流されてくる臭いでありました。石巻ではこのヘドロが乾き風に流され、それが口に入り、奉仕活動の帰りは喉がイガイガすることが度々ありました。石巻での受け入れ施設は私の恩師の小鮎牧師が教会をされています石巻栄光教会をお借りし、我々ボランティアの派遣先は、石巻栄光教会・幼稚園の関係の方々のお宅を中心として、その親戚・友人・近所の方々のお宅に伺うこともありました。

これから石巻での活動動画と画像を見ていただこうと思いますが、今から出てくるお宅は石巻栄光教会の教会員のお宅であります。(スライド上映)

何のため、誰のために・・・

これらの画像や動画を実際に目の当たりにし、今振り返って思うことは「私たちは何のために、誰のために現地に行くのか」ということです。被災地に行くと、そこに住んでいるすべての方が被災者であり、その一人ひとりにその人にしかない物語があります。たくさん被災された方々からボランティアに来てほしいという要望があります。できるだけその要望に応えていきたいという思いのなかで、時にはスピードを要求されることもあるかもしれませんが、私たちは業者ではなく素人です。その素人の私たちにできることは一体何なのか。本当にここにきた意味はあったのだろうか。そんなことも時には考えました。

しかし私は、派遣先で奉仕活動をしながらか、「被災された方々の声を聞く」ということを忘れてはいけないと感じました。カウンセラーでもありませんから心のケアなど到底できませんが、それでも被災された方々がまだ思い出にもなっていないあの辛い経験を私たちに話してくれるその思いと、お話の後での「今日は奉仕してくれてありがとう。本当に助かりました」と涙目になりながら言うてくださる皆さんの気持ちを、私たちは大切にしなければならぬと思います。

最終日、小鮎夫妻と私の三人でお話をする時間が与えられました。そのとき、小鮎牧師は「神の御旨がわからないと思うときもあった。今でも神様は何を思っているのかをなされたのかと聞かれると何で言っているのかわからなくなる。だけどきっと神様は私たちに新しい道を備えてくださっているし、この震災を通して何か伝えようとしていると僕は思う。そして、今回の震災で日本各地からたくさんの支援が届き、またボランティアの方々に来てくれた。海外からも私たちが覚えて義援金や物資が届いている。本当にありがたい繋がりがたくさんある。そんな繋がりを私たちが忘れてはいけないし、大切にしなければならぬと思う」と涙ながらに語っておられました。

復興に何年かかるかわかりませんが、私たちは被災された方々が、「復興できた」と感じるそのときまで、状況によってその形を変えながら支援させていただくことが必要だと思いました。

「痛みを伴うときに」

さて、司会者に読んでいただいた聖書箇所はとても中途半端なところから始まっておりますが、最初のほうに出てきましたこの「心を打たれて」という部分の原文を直訳いたしますと「心を刺し貫かれた」と書かれております。この心を刺し貫くぐらいの「痛み」が、神との出会いへと繋がりを、最終的に三〇〇〇人の人が洗礼を授かるということになったのです。

今日ここにお集まりの中にはクリスチャンでない方もおられると思いますが、皆さんに考えていただきたいと思っております。

「神様」という存在を真剣に考えた、また改めて考え直したときが少なからずおありだと思いますが、それは一体どういうときであったのでしょうか。

私は「痛みのとき」ではないかと考えます。

幸せなときより、痛みを伴っているときの方が神様の存在を考えるのではないのでしょうか。

今回の大震災そして津波で経験されたものを、簡単に「痛み」また「嘆き」というもので終わらせていいものか考えますが、我々はこの「痛み」や「嘆き」によって神様という存在に出会うのであります。イエス様が仰っていた通り「悲しんでいる人達は幸い」だったのであります。

そして、先ほども言いました小鮎牧師が仰っていました「繋がりを」。

今回の震災でたくさんの繋がりが生まれました。私は先ほど司会者に読んでいただいた聖書箇所に出てくる初代教会の信者の姿を今回の震災後の世界中の皆さんの姿と重ね合わせる事ができると思います。そしてそこには素敵な「繋がりが」あるのだとも重ねて思うのであります。すべての物を共有することによってできた繋がりを、財産や持ち物を売ったときにできた繋がりを、毎日ひたすら心一つにすることによってできた繋がりを、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をしたときにできた繋がりを。そしてこの世界にまで広がる、クリスチャンであるかないかに関わらずできたこの繋がりを、私はこれから先も大切にしていきたいと願って止みません。

お祈りいたします。

天の父なる神様。

今日こうしてあなたによってここに集うことができ感謝致します。

今回の東北地方で起こりました大地震によって多くの痛みや嘆きが生れました。しかし痛みの向こうに、嘆きの向こうにどうか貴方が新しい道を備えて待っていてくださいますように。どうか、そのことを信じぬく私たちでありますように。貴方に出会い、貴方によって繋がる私たちの中にどうかあなたが共にいてくださいますように。そしてその繋がっているお一人おひとりをあなたが祝してください。

このお祈りをここに集います一人ひとりの祈りと合わせ、御前にお捧げ致します。

アーメン